

今週の為替相場見通し(2017年9月11日)

総括表		先週の値動き		今週の予想レンジ
		注	レンジ	
米ドル	(円)		107.32 ~ 109.92	107.85
ユーロ	(ドル)		1.1855 ~ 1.2092	1.2037
(1ユーロ=)	(円)		129.37 ~ 131.09	129.72
英ポンド	(ドル)		1.2908 ~ 1.3223	1.3197
(1英ポンド=)	(円)	*	141.20 ~ 142.69	142.33
豪ドル	(ドル)		0.7932 ~ 0.8125	0.8054
(1豪ドル=)	(円)	*	86.56 ~ 87.73	86.86

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

為替営業第二チーム 藤巻 龍太郎

(1)今週の予想レンジ: 106.00 ~ 111.00 円

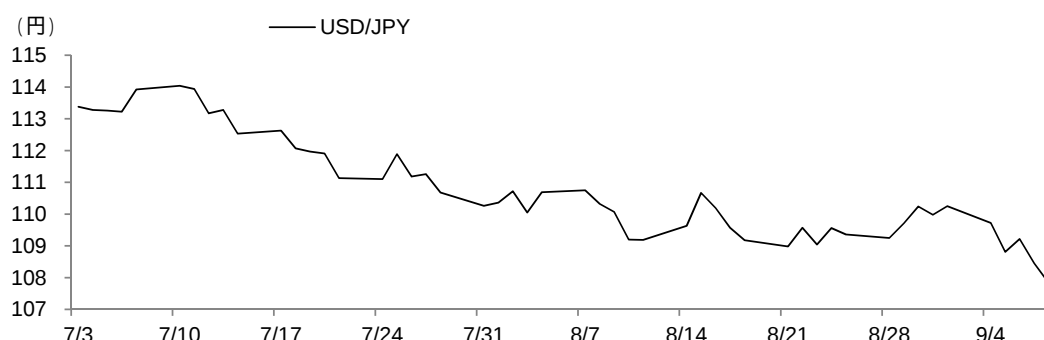
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は徐々に値を下げる展開。3日の北朝鮮の水爆実験実行を受け、週明け4日のドル/円は大きくギャップダウンし109円台前半でオープン。その後週高値となる109.92円まで一時反発も、地政学リスクが意識される中109円台半ば割れまで反落した。5日に北朝鮮が大陸間弾道ミサイル(ICBM)を西岸に移動との報道を受け、ドル/円は109円台前半まで下落。更にブレイナードFRB理事が早期利上げに難色を示したことなどを背景に、ドル/円は108円台後半まで下落。6日は108円台前半まで続落した後、米株が堅調に推移するとドル/円は109円台前半まで一時上昇したが、フィッシャーFRB副議長が任期終了前の10月半ばに辞任との報道を受け、今後の金融政策運営の不透明感が強まり108円台後半まで下落。だが、ハリケーン被害救済法案に債務上限の引き上げを含めることで合意との報道を受けドル/円は109円台半ばを回復した。7日はECB政策理事会を目前にドル安が進行し108円台後半まで軟化。その後ドラギECB総裁はユーロ高を警戒する発言をしたものの、市場が懸念するほど強いトーンではなくドル売りが進行し、ドル/円は今年の安値の108.13円を抜け108.05円まで急落した。8日は、ドル安基調の継続に加え、週末の北朝鮮リスク回避の円買いの動きもあり、節目の108円を抜け一時週安値となる107.32円まで急落。その後はポジション調整も入り107.85円で越週した。

今週のドル/円相場は上値の重い推移を予想する。足許のドル/円の動きについては、地政学リスクの高まりによる円需要もあるが、主因はドル安である。ドル安の要因としては、ユーロ高、FRBによる追加利上げ期待の後退、米政治不安、ハリケーン懸念などがその背景にあり、これらの前提を覆すような材料がない限りは、ドル/円の上値の重い推移は継続するであろう。また、FOMCを翌週に控える中、株などのリスク資産を圧縮するような動きが生じる場合については、円キャリートレードに伴う円ショートポジションの巻き戻しから、下落する可能性もある。但し、北朝鮮の建国記念日明けに地政学リスクが後退する場合や、経済指標(注目は14日(木)の米8月消費者物価指数(CPI)、15日(金)米8月小売売上高)が市場予想を上回る場合、および米国政治においてポジティブなヘッドラインが発表される場合等においては、ドル/円が上昇する可能性にも留意したい。

(3)先週までの相場の推移

先週(9/4~9/8)の値動き: 安値 107.32 円 高値 109.92 円 終値 107.85 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

(1) 今週の予想レンジ: 1.1850 ~ 1.2250 128.00 ~ 132.00 円

(2) ポイント[先週の回顧と今週の見通し]

先週のユーロ相場は対ドルで上昇した一方、対円ではもみ合い推移となった。週初4日に対ドルで1.18台半ば、対円では129円台後半でオープン。対ドルではオープン直後に週安値となる1.1855をつけたが、じりじりと値を上げて1.19台に乗せた。対円では大きくギャップダウンしてオープンしたドル/円が反発したことを受けて130円台後半まで上昇した。5日は7日にECB政策理事会を控えて様子見ムードとなり1.19台前半を中心とした動意に乏しい推移となった。対円では北朝鮮による地政学リスクやブレイナードFRB理事のハト派発言などからドル/円が下落する動きに連れて129円台半ばまで値を下げた。6日はハリケーン被害救済法案に債務上限の引き上げを含めることで合意したとの報道を受け米金利が上昇しドル買いが強まると1.19前半まで値を戻した。対円では一時週安値となる129.37円をつけたものの、その後は米債務上限に関する報道などを受けてドル/円が上昇すると、130円台を回復した。7日はECB政策理事会に向けてドル売りが進み、1.19台後半まで上昇。理事会後のドラギECB総裁の会見では10月理事会における量的緩和(QE)縮小の決定が示唆されたことからユーロが急騰し対ドルで1.20台半ば、対円では一時週高値131.09円まで上昇した。8日もECB理事会後のユーロ買いが継続し、対ドルで一時週高値となる1.2092まで上昇。その後はやや売り戻され1.20台前半で越週した。対円では全般的なドル売りの流れの中、ドル/円が急落する動きに連れて129円台半ばまで値を下げた。その後は小幅に水準を戻し129円台後半で越週した。

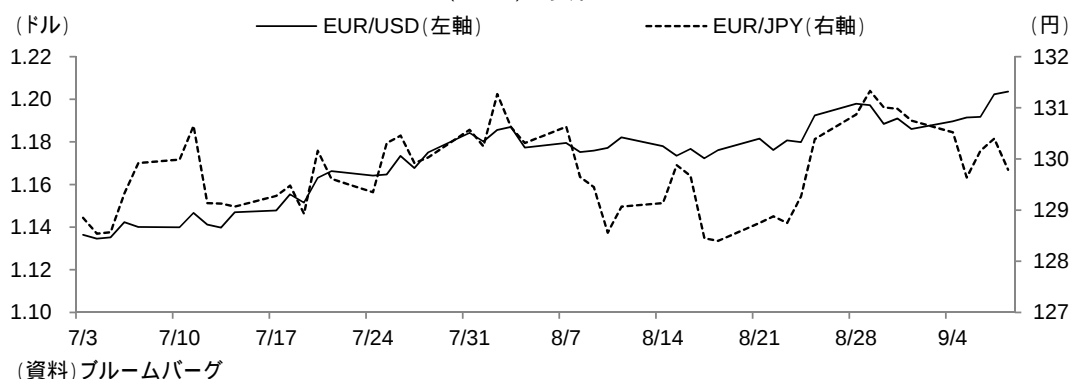
今週のユーロ相場は底堅い推移を予想する。注目されたECB政策理事会後のドラギECB総裁の会見では「ユーロのボラティリティを注視している」、「たいていのメンバーがユーロ相場に懸念を表明した」などのユーロ高けん制と取れる発言が複数あったが、会見後にユーロはむしろ買い進められる展開となった。理事会前からユーロ高けん制に対する警戒感に相応に高まっており、この程度の発言は想定されていたことに加えて、10月理事会においてQE縮小の決定が示唆されたことがより材料視されたことが先週の値動きにつながったと言えそうだ。よほど踏み込んだユーロ高けん制発言がECB関係者から飛び出さない限りはQE縮小期待を背景にユーロが買われやすい地合いが続くと考えられる。また、足許ではドルの軟調推移が続いている。今週も米国のインフレ停滞懸念やトランプ政権への先行き不透明感や、さらには大型ハリケーン「イルマ」に対する懸念などから引き続きドル売り優勢の展開を予想しており、相対的にユーロ相場を押し上げる材料として意識されそうだ。高値圏での推移を続けてきているだけに、ポジション調整的な動きから一時的にユーロ売りが進む局面は想定しておきたいが、先週ECB後の流れを引き継ぎ底堅い推移を基本線として予想する。

(3) 先週までの相場の推移

先週(9/4~9/8)の値動き:

(対ドル) 安値 1.1855 高値 1.2092 終値 1.2037

(対円) 安値 129.37 高値 131.09 終値 129.72



3. 英ポンド

欧州資金部 山田 杏奈

(1) 今週の予想レンジ: 1.3100 ~ 1.3350 142.00 ~ 143.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、北朝鮮情勢をめぐる警戒感やハト派姿勢を維持したECBなど材料が交錯する中、対主要通貨で上昇した。対ドルでは、週を通して北朝鮮情勢の緊迫化を受けたドル安圧力を背景に、ポンド/ドルは大幅に上昇。週初1.295近辺でスタートしたポンド/ドルは、北朝鮮情勢の悪化に加え、大型ハリケーンによる米国での被害拡大も懸念され、ドルの全面安により5日に1.3を突破した後、8日には1.3223まで上昇した。これは8月2日につけた直近高値と同水準である。5日にポンド/ドルが1.3を突破した背景には、プレイナード理事が追加利上げに慎重な姿勢を示したことで、市場の利上げ期待が後退したことが考えられる。対円では、リスクオフを背景とした円買いが加速し、ポンド/円はほぼ横ばいで推移。対ユーロでは、ECB理事会後にユーロが買われる展開となったが、その後ユーロ/ポンドは小幅に下落。ECB理事会では、ドラギECB総裁がハト派姿勢を維持したことに加え、「為替市場のボラティリティは不透明感の原因」と、ユーロ高についても警戒的なトーンを示した。この内容を受けてドイツ長期金利は底堅く推移した一方で、ユーロは対主要通貨で強含んでおり、ドラギ総裁の会見前に0.914近辺にいたユーロ/ポンドは、一時0.919を突破する場面もあった。ドラギ総裁の会見でユーロ高について警戒する発言があったにもかかわらず、ユーロが買われる展開となったことで、ユーロ高バイアスの強さを改めて確認する結果となった。一方で、8日にはユーロ/ポンドのロングポジションの巻き戻しが入り、ユーロ/ポンドは大幅に下落。これは9日の北朝鮮の建国記念日の警戒感から、ポジションを軽くする動きがあったことが要因と考えられる。

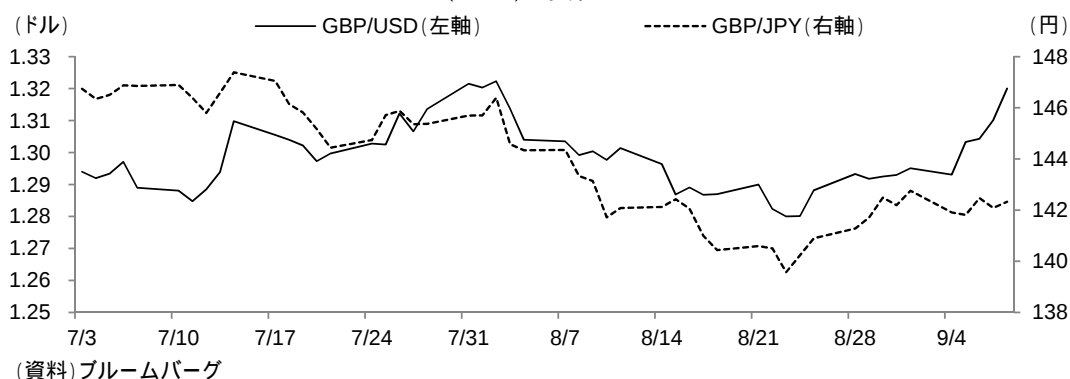
今週の英ポンド相場は、小幅上昇を予想。大型ハリケーンによる被害拡大も引き続き懸念される中、米長期金利低下によるドル安シナリオは継続する見通しである。今週も引き続き、英国以外の強弱入り乱れる要因に振らされることが予想され、グローバルな市場の動向を注視する必要がある。英経済指標は、12日(火)に英8月CPIと英8月PPI、13日(水)に英8月失業率、14日(木)に英8月小売売上高と、重要な指標が多数あることに加え、14日(木)には英中銀(BOE)の金融政策委員会が開かれる。BOEは8月の金融政策委員会で、経済がBOEの見通しに沿って成長するのであれば、市場の織り込み以上に金融政策を引き締める必要があり得るとのメッセージを発している。依然としてBrexit交渉における不透明感が強い中、BOEの金融政策動向にも注目が集まる展開が続くようだ。

(3) 先週までの相場の推移

先週(9/4~9/8)の値動き:

(対ドル) 安値 1.2908 高値 1.3223 終値 1.3197

(対円) 安値 141.20 高値 142.69 終値 142.33



4. 豪ドル

(1) 今週の予想レンジ: 0.7950 ~ 0.8100 86.50 ~ 88.50 円

(2) ポイント[先週の回顧と今週の見通し]

先週の豪ドル相場は米ドル安が進行する中で堅調推移。週初4日、豪ドル相場は週末の北朝鮮による水爆実験報道を受け対ドル0.79台半ば水準までギャップダウンしてオープン。オセアニア時間には週安値となる0.7932をつけていたが、その後は米国休場で市場参加者が限られる中でレンジ推移。翌5日、発表された豪4～6月期経常収支は96億豪ドルの赤字と赤字幅が大幅に拡大する結果となったが、輸出も拡大を示していたため、豪ドルは0.79台後半まで上昇。豪州準備銀行(RBA)理事会では政策金利据え置きが決定されたほか、声明において「経済は上向いているものの、賃金の伸び率鈍化や家計負債の拡大などの不透明要素を抱えている」と示されたが、為替相場への影響は限定的。一方でその後の米国時間には米ドル安が進む中で豪ドル相場は0.80台前半まで上昇。週央6日、発表された豪4～6月期GDPは前期比+0.8%と事前予想同+0.9%に対し弱い結果となり、豪ドル相場は0.79台後半まで下落。米国時間にはカナダ中銀の利上げを受け豪ドルは連れ高となり、再度0.80台前半まで上昇。翌7日、発表された豪7月小売売上高と豪7月貿易収支の事前予想を下回る結果を受けて0.79台後半まで下落。その後の欧州中央銀行(ECB)政策理事会を受けたユーロ高・米ドル安局面では、米ドルは対豪ドルでも弱含み、0.80台半ばまで上昇。週末8日、週末に建国記念日を迎える北朝鮮関連地政学リスクや大型ハリケーン「イルマ」への警戒感から米ドル安が進行する中、豪ドル相場は週高値となる0.8125をつけた。しかしながら米国時間には水準を戻し、0.80台半ば水準にて越週した。一方、対円では87円ちょうど近辺にてオープン。週を通してレンジ推移が継続し、6日に週安値86.56円、8日に週高値87.73円をつけた後、86円台後半水準にて越週した。

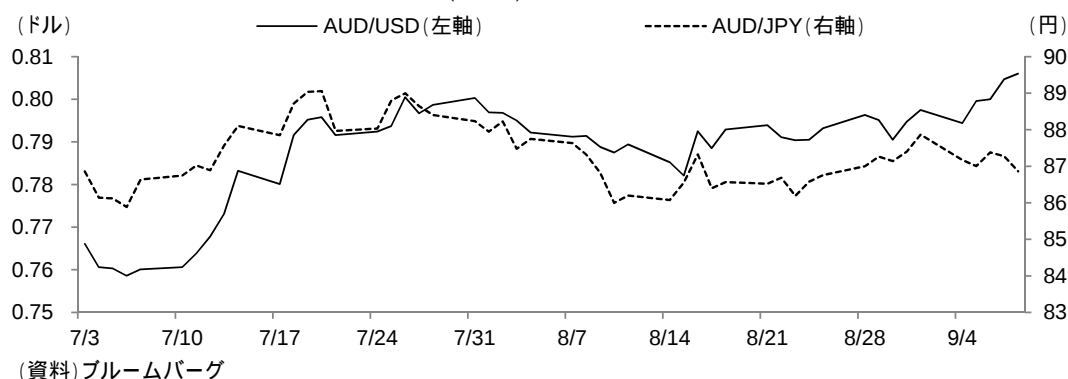
今週の豪ドル相場は上値重い展開を予想する。先週の金融市場においては、北朝鮮関連地政学リスクの高まりや米国の大型ハリケーンに対する警戒感からリスクオフトレードが促進された印象を受ける。現時点において、前者については引き続き動向に警戒が必要である一方、後者についてはやや勢力が弱化したとの報道が見られる状況にある。斯かる中で、追加材料が発生しない限りにおいてはリスクオフトレードが今後活発化するというよりは、先週変動分の戻しが入り易い状況にあるとの印象である。週後半に予定されている豪8月雇用統計についても、先週のRBA声明において弱気な見方が示された事を振り返れば、相対的に失望の結果となる可能性が高いだろう。総括すれば、北朝鮮情勢への警戒は怠れないものの、メインシナリオとしてはリスクオフトレード巻き戻しと豪ドル相場の軟化を予想する。なお、その他の主な経済指標・イベントとしては、12日(火)に豪8月NAB企業景況感、13日(水)に豪9月ウエストバック消費者信頼感指数、14日(木)に豪8月雇用統計の発表が予定されている。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(9/4～9/8)の値動き:

(対ドル) 安値 0.7932 高値 0.8125 終値 0.8054

(対円) 安値 86.56 高値 87.73 終値 86.86



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。